

## 辛口レポート抄

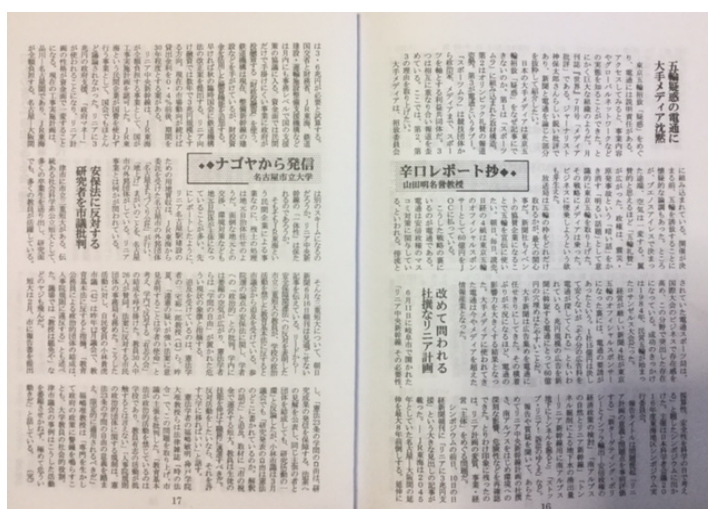
東海ジャーナリスト第106号の巻頭言は、元JCJ東海代表幹事の遠藤雄久さんである。遠藤さんから、多くのことを学んできた。さすが鋭い。一部だけでも紹介したい。

4月の半ば外国人特派員協会主催の記者会見で、「表現の自由」に関する国連特別報告者が、この国で表現の自由が危機に瀕しているとの見方を示したことは大きな反響をもたらした。特別報告者のデービッド・ケイ氏は、カリフォルニア大学法学部教授で、国連人権委員会の任命を受けて来日約1週間、実に精力的に調査・聞き取りを行っている。

ケイ氏は記者会見のなかで、報道幹部が政府高官と会食するような行為は慎むべきだ、とも指摘した。ケイ氏も洞察しているように、「メディアの弱点」の大半は、メディア自身が招いているものである。この会見を伝えた新聞の視点は「政府の圧力」「報道の自由に脅威」など権力からの――つまりは外からの問題にのみしぼられ、ケイ氏が力を込めて覚醒を促したメディアみずからのあり方に触れるものはなかった。ちなみに、これを報道したテレビチャンネルはなかった。

編集後記に次のように書かれている。――山田さんの「辛口レポート抄」が、今号から新たに登場した。山田さんは、自分のホームページに毎日1編ずつ、その時々々の社会批判や心境をつづったレポートを掲載している。それを愛読する私は常々、これを小誌に活用する手はないかと思っていたが、ある日そのうちの3本を選んで、2ページ見開きのコラムを試作編集して、山田さんのもとに送った。「私の発信したものが、少しでも多くの人に読んでもらえるのはうれしい」との返事をいただき実現した。

今回選ばれたのは「五輪疑惑の電通に大手メディア沈黙」（6月21日）、「改めて問われる杜撰なりニア計画」（6月13日）、「安保法に反対する研究者を市議批判」（6月23日）の3本のレポートだ。ベテランのジャーナリストに「レポート集」が目にとまり、東海ジャーナリストに収録してもらい、こんなに嬉しいことはない。これを「励み」にして、毎朝のレポート執筆に力を入れていきたい。



(2016年7月8日)